

Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2011

Report

2011

巻頭言

対話と共生：創出すべき21世紀文明の構成原理
(第4期研究プログラムの開始)



川野辺 裕幸

文明研究所所長
政治経済学部教授

2011年度、文明研究所は、再発足以来、3期にわたる研究プログラムの積み重ねのうえに第4期研究プログラム(2011年4月～2014年3月)を開始しました。「創出すべき21世紀文明」の構成原理として第3期から打ち出した「対話と共生」をさらに進め、コアプロジェクトにA.文化の境界と対話、B.アイデンティティの多様性と共生、C.グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築、の三つの研究テーマをおき、それぞれに研究チームを編成して研究に当たることとしました。各研究テーマは次のように展開されます。

A. 文化の境界と対話：現代文明は多様な文化システムが接触しつつ形成されましたが、それ自体独自の特性を発達させてローカルなシステムの上に覆いかぶさっています。その顕著な特性は便利さ・快適さへの極度の傾向であり、また地球規模での普遍化・画一化です。その特性により現代文明はローカルなシステムを変容させ破壊しつつ、それ自身が深い困難と亀裂に直面しています。その克服に必要とされるのは多様な文化・文明間の対話です。このプロジェクトでは、それらの境界において生じる対立、融合、対話を通して、多様な文化・文明間の接触と変化のダイナミクスを研究します。

B. アイデンティティの多様性と共生：「われわれとは何か」という問題は人間の社会の形成とともに出現したと考えられます。また、現代においてもなお問われ続けています。近代の国民国家システムは「国民としてのわれわれ」のアイデンティティを必要とし、そのための制度や文化を創り出してきましたが、同時にそれは「われわれではないもの」の産出をも意味しています。このプロジェクトでは、戦争、対立、支配、差別と密接に結びついてきた、国民、人種、民族そしてジェンダーの固定し階層化されたアイデンティティのありようを検討し、多様なアイデンティティの共生の可能性と方法を研究します。

C. グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築：情報通信技術の革新から始まったグローバリゼーションは、21世紀に入り、経済活動の世界的連結を超えて、社会活動のあらゆる部面に浸潤するに至っています。一方、途上国の人口爆発と先進国の少子高齢化、資源制約・地球環境と生物多様性の危機など、20世紀から受け継いだ社会を取り巻く制約条件はいっそう厳しさを増しています。旧来の制度、秩序、価値はこうした挑戦と試練にどう応えていくのか、あるいは旧来の制度、秩序を超えた新たな価値が提起されるのか。このプロジェクトでは、グローバリゼーションのもとでの新しい社会システムのありようを研究します。

D. 東海大学ラテンアメリカ・プロジェクト：東海大学文明研究所が所蔵するアンデスの遺物を学内に公開し、本研究所の研究成果を学内に還元することは、本研究所にとってアンデス遺物の取得以来の念願でした。また、本研究所は在日ブラジル人の子どもたちへの支援活動を長年にわたってサポートしてきました。2011年度は『「生命と自然」アンデス土器・織物展』の学内展示にあわせて、チャレンジセンターによる学生プロジェクト「Beijo Me Liga」との連携によるマルチカルチャーキャンプの企画・実施、さらに(株)富士サービスと連携による「ラテンアメリカ・フェア」でのラテンアメリカ食提供の企画と監修というコラボレーションを企画しました。展示の企画・運営に文学研究科ならびに文学部アメリカ文明学科学学生が参加し、50名を超えるチャレンジセンター・プロジェクトとの連携を行い、集い力、挑み力、成し遂げ力という本学の教育目標を研究分野へ広げていく契機としました。

個別研究プロジェクト：東日本大震災と文明

東日本大震災はその被災の範囲・深刻度において、近年の災害の中でも現在の世代が経験したことのない大規模な自然災害となりました。歴史的記憶を超えた自然災害に人間はどう対応することができるのかという問題がわれわれに突きつけられました。さらに、原発事故、サプライチェーンの破綻から、原子力エネルギー依存、グローバリゼーションへの対応法という、現代文明のあり方を反省させる契機ともなりました。個別研究プロジェクト「東日本大震災と文明」は、こうした観点から急遽編成されたものです。建学の理念である「調和のとれた文明社会の創造」の研究を第一に担う当研究所は、東日本大震災が現代文明に投げかけた様々な問題に正面から取り組むことが必要であり、また、その研究の成果を学内外に発信することは、教育研究機関としての大学に附置された研究所の責務であると考えています。

現代文明研究への道程

2001年度に文明研究所（現総合教育センター）の研究部門と社会科学研究所、芸術研究所を統合して再出発した文明研究所は、本学創立者・松前重義の雄大な世界観を引き継ぎ、学内の幅広い分野からの兼任研究者の結集を受けて、総合科学的な視点から現代文明のあり方を問う研究機関です。その設置目的は、「文明を人類の営為の総体として捉え、その主体としての人間とその具体相である生活を主軸として、学際的・総合的見地から探求し、その成果を調和のとれた文明社会の創造に資する」ことであり、新しい文明の創出、人間の新しい生き方の実践的な研究をその基本理念としています。

再発足以来、当研究所は、この「21世紀文明の創出」という、とてつもなく大きな研究目標に正面から挑戦して研究活動を展開してきました。第1期研究プログラム（2001年度～2004年度）においては、「現代文明の展開と社会文化的多様性」をコア研究プロジェクトとして掲げ、現代文明研究の広さと、深度をさぐり、当研究所としての現代文明を解明する視座を確定することをめざしてきました。そこで明らかになったことは、現代文明が、グローバルゼーションのもとでフラットな地球社会が成立するという理解では到底たどり着けない多様性と異相性を持つという認識でした。

第2期研究プログラム（2005年度～2007年度）はそのグローバルゼーションの持つ意味を、人間の生活の変化という観点からとらえることとし、「グローバルゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」としました。その結果、地域研究と国際的な研究連携を進めることで、現代文明研究にもう一つの奥行きを与えるものにもなりました。

第2期までの研究で、現代文明の多様性と異相性の認識を地域研究と国際的研究連携によって深めることができましたが、この研究成果を受けて、第3期研究プログラムは、現代文明に対する視点を「対話と共生を原理とする新しい社会の構築」として、21世紀文明のあり方に対する積極的提言をめざしました。本学の中期目標（2009年度～2013年度）における研究の目標には、「持続可能な社会の実現のため、研究の重点化を図り、戦略的な研究分野を確立する」と謳われています。本研究所は、グローバルゼーションのもとで持続可能性のある社会を築いていくためには、新たな構成原理として「対話と共生」のもとに現代文明が打ち立てられるべきであると考え、そのあり方を提言していくこととしたものです。その成果は、2011年3月に出版された東海大学文明研究所編『<ありうべき世界>へのパースペクティブ』東海大学出版会に結実させることができました。



沿革

- 1959年 文明研究所設立（初代所長 原田敏明）
- 1964年 基礎社会科学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1969年 芸術研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1982年 法学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1988年 基礎社会科学研究所、法学研究所を統合して社会科学研究所設立（初代所長 白鳥 令）
- 2001年 文明研究所、社会科学研究所、芸術研究所を統合して新文明研究所設立（初代所長 松本亮三）

2011年度の研究プログラム

包括的研究プログラム

前頁で素描した3期にわたる研究の積み重ねの上に、2011年度は第4期研究プログラム（2011年4月～2014年3月）を開始しました。第4期研究プログラムは、「創出すべき21世紀文明」の構成原理として第3期から打ち出した「対話と共生」を理念とする新しい社会の構築」をさらに一歩進め、以下の3つの研究テーマそれぞれの下に研究チームを編成し、研究にあたることにしました。

- A 文化の境界と対話
- B アイデンティティの多様性と共生
- C グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築

また、引き続き国内外の他の研究所との連携を深め、本研究所を、文明研究に関する諸研究所の“ハブ”として機能するものにしていくべく、体制を整備したいと考えています。

個別研究プログラムと代表者

- 緊急テーマ「東日本大震災と文明」 川野辺裕幸（政治経済学部経済学科）
- 公募プロジェクト「中国の政策決定における台湾要因－国家建設・政党政治・安全保障・地方政府における両岸の対話と相互作用」 高橋祐三（教養学部国際学科）

東海大学ラテンアメリカ・プロジェクト

2011年秋、文明研究所は、東海大学内の様々な部署と連携して、ラテンアメリカ・プロジェクトを展開しました。

● 展覧会「生命と自然」

〔2011年9月12日（月）～10月20日（木） 湘南キャンパス11号館図書館展示室〕

文明研究所が所蔵する南米・中央アンデス地域の先

史時代の遺物1691点の中から41点を選び、古代アンデスの人々と自然との関わりについて紹介しました。



● 「マルチカルチャー・キャンプ」〔2011年10月8日（土）～10日（月） 湘南キャンパス〕

文明研究所では、チャレンジセンターの学生グループ「ベイジョ・メ・リーガ」との共催で、10月8日～9日に湘南キャンパスでマルチカルチャー・キャンプを開催しました。これは、日本に住む外国籍の子ども達を集めて交流してもらおう活動で、2006年より本学の学生が毎年数回にわたって開催するのを文明研の研究の一環として支援してきたものです。今年10月のキャンプには、岐阜や茨城のブラジル学校からたくさんの中・高生が参加して、総勢200人の大きな催しとなりました。



● 「ブラジル・ペルーフェア」

〔2011年10月3日（月）～8日（土） 湘南キャンパス、バブレストラン8、11号館食堂〕

ラテンアメリカ文化紹介の一環として、(株)富士サービスと共同でブラジル、ペルー現地のメニュー7種類を再現して学生、教職員の皆さんに召し上がっていただきました。



シンポジウム・講演会

シンポジウム

「震災復興とエネルギー対策」

「東日本大震災と文明」プロジェクトは、文明研究所第5回研究会の一環として、2011年12月8日（木）に震災復興とエネルギー対策を中心としたシンポジウムを開催しました。第一部では、まず基調講演として、川島博之東京大学准教授が、原発に依存しないエネルギー戦略について講演しました。それに引き続き、川野辺裕幸東海大学教授が震災復興をテコとした政策課題の解決について、杉本隆成東京大学名誉教授が自然災害を超える復興対策のあり方について、それぞれ講演しました。

第二部のパネルディスカッションでは、上記の三人の講師がパネリストとなり、会場に詰めかけた約40名の聴衆も交え、わが国のエネルギー政策についての突っ込んだ議論がなされました。

（川野辺裕幸）

第1部

基調講演

- 川島博之（東京大学大学院農学生命科学研究科准教授）「震災後のエネルギー戦略」

指定討論者 川崎 一泰（東海大学政治経済学部准教授）

報 告

- 川野辺裕幸（東海大学政治経済学部教授、文明研究所所長）「震災復興と経済政策課題」

指定討論者 西川 雅史（青山学院大学経済学部教授）

- 杉本 隆成（東京大学名誉教授、東海大学講師、文明研究所研究員）「震災復興の自然条件」



第2部

パネルディスカッション「東日本大震災と復興戦略」

パネリスト 川島 博之 杉本 隆成 川野辺裕幸

文明研究所第26回講演会

「オキシトシン・ラブ～お産とおっぱい、愛のホルモンを科学する」

ミシェル・オダン（通訳：小貫大輔）

第26回文明研究所講演会は、2012年1月24日（火）に開催されました。1970年代にフランスの病院で「水中分娩」の効用を発見して学会に発表し、世界的に知られるようになったミシェル・オダン先生は、お産の現場で過度な医療介入が進み、「自然な姿で赤ちゃんを産む女性の数が世界的にゼロに近づきつつあること」に警鐘を鳴らし続けてきた方でもあります。オキシトシンとは、お産では陣痛、母乳育児では射乳反射を引き起こすホルモンのことですが、近年、哺乳類のつがい形成、人間の穏やかな愛着や信頼の情の形成に必要な神経伝達物質としても知られるようになりました。陣痛誘発剤や無痛分娩、帝王切開の広がりによって、オキシトシンの働きなく赤ちゃんを産むようになった女性が、二世帯、三世帯と世代を重ねていく中で、未来の親子の関係、ひいては人間の発達の道筋はどうなってしまうのだろうか…、文明のあり方そのものについて深く考えさせられる講演となりました。

著名な講師の講義とあって、会場には学外・学内から130人ほどの聴衆が詰めかけ、床に座る人や、廊下から話を聞く人も出たほどで、熱気に包まれた会となりました。（小貫大輔）



戦争の記憶と死者のアイデンティティ

池上佳助

文学部北欧学科准教授

文明研究所が掲げる「21世紀文明の創設」という大命題に、所員としての個別研究を通じてどのように取り組んでいるのかご紹介したい。

21世紀文明のありうべきかたちを構想するにあたり、歴史の連鎖・連続性を重視する立場から、まず20世紀の時代性を学び直し、複合的に絡み合った20世紀の歴史をいかに21世紀に組み込んでいけるかを提起した。20世紀はしばしば「戦争の世紀」、「大量殺戮の時代」と形容される。ホロコースト、原爆、南京大虐殺、従軍慰安婦問題などは「過ぎ去らない過去」として未だに論争が続いている。加害と被害の公的な記憶(Public Memory)はときにナショナリズムを刺激し、感情的な対抗関係を生起させる。研究ではそうした記憶の断絶をいかに認識、受容し、そこから「共生」という価値に裏付けられた新たな記憶の形成が可能か探求している。

1. 記憶の位相と相克

ここ数年来、沖縄戦を事例研究の対象にして戦争の記憶の問題に取り組んでいる。近年、沖縄戦については教科書問題や大江裁判に見られるように沖縄



渡嘉敷島の集団自決跡地

住民の「集団自決」や住民虐殺をめぐり、それらが日本軍による死の強制であったかどうかが論議されている。沖縄戦は「日米最後の戦闘」かつ「国内唯一の地上戦」といわれ、兵士の戦死者数を上回る住民が犠牲となった悲惨な戦いであった。戦後、旧軍人は戦闘の記憶—自身の苦難の生還と戦友の非業の死—を雄弁に語ったが、住民犠牲にはほとんど触れることはなかった。軍人主観による語りでは、ひめゆり学徒隊の悲劇や「集団自決」も「崇高な犠牲的精神」による死とみなされた。1970年代に入り、ようやく住民証言に基づく戦争記録が編纂されるようになり、それまで沈黙の中で内在化していた戦場の記憶が一挙に噴出してきた。住民の語りは、「敵国」米軍による被害体験よりも「友軍」であるはずの日本軍による差別、虐待、死の強制に関するものが圧倒的に多かった。こうした記憶の断層は何に起因するのであろうか。近代以降、沖縄は日本「本土」から周辺化・階層化されてきた歴史的背景がある。沖縄戦を考える時に、その時間軸を戦時に限定するのではなく、戦前・戦後にまで拡張して見ていく必要があるのではないか。(拙稿「戦争の記憶—記憶の共生は可能か」『文明』東海大学文明研究所NO. 13, 2008, 37-47頁参照)

2. 記憶の共生

沖縄戦は多面的な性格を有していたが、日本の植民地支配の実像が現前化した戦いでもあった。戦時中、朝鮮や台湾出身者が軍夫や慰安婦として沖縄に強制連行され、多数が犠牲となった事実は余り知られていない。摩文仁の丘にある記念碑「平和の礎」には彼らのごく一部が実名で刻銘されているが、その実態は今も不明である。日本の加害の記憶が抹消されているのである。沖縄戦の空間軸を戦場の沖縄に限定するのではなくアジア全域に拡大して、沖縄戦を植民地支配の結節点として位置付けることで、忘却された加害の記憶を掘り起こせないだろうか。そして、沖縄戦を米軍—日本軍—沖縄住民—朝鮮・台湾人という多層構造における相互の関係性から見直すことで、加害と被害の二項対立的な記憶ではなく、「灰色の領域」にある記憶(被害



平和の礎

者でありながら同時に加害者でもありえた記憶（その逆も）を想定することはできないだろうか。（拙稿「記憶の共生－戦争の加害と被害の間」東海大学文明研究所編『ありうべき世界へのパースペクティブ』東海大学出版会2011年,79-113頁参照）

3. 朝鮮人特攻兵のアイデンティティ

沖縄戦の末期、日本軍は米軍艦艇へ「必死」の体当たり攻撃を行う航空特攻作戦を発動し、陸海軍あわせて約1900機が参加し、3000人を上回る戦死者を出した。戦後、特攻は若者が命と引き換えに行った「崇高な」行為で、その死は「祖国のための尊い犠牲」であると顕彰され、殉国美談として神話化されてきた。その特攻戦死者の中に10数名の朝鮮出身者（諸説あり）が含まれ（陸軍特攻基地があった知覧の特攻平和会館による「特攻戦死者芳名録」には11名が「日本名」で記されている）、靖国神社に「祭神」として合祀されている。特攻は建前上「志願」ということになっているが、はたして朝鮮人特攻兵は自ら主体的に日本／天皇のために死を選択したのであるか。植民地支配下の「日本人」として自らの死をどう受容したのであるか。一方、韓国では戦後の「過去清算」論議の中で、特攻戦死者は対日協力者、つまり「反民族行為者」として非難の対象となってきた。その遺族は死んだ親族が了解のないまま一方的に日本の「祭神」とされた上、靖国神社からは合祀の取り下げを拒否されている。韓国では裏切り者

の家族として冷遇され沈黙を強いられてきた。遺族の戦後はまさに二重の苦しみに苛まれてきたのである。日本では「英霊」と讃えられ、韓国では「親日派」と蔑まされる朝鮮人特攻戦死者のアイデンティティの揺らぎをわれわれはどう受け止めるべきであろうか。

今、そうした問いにどう応答しようかと文献資料を読み漁っている。



知覧特攻平和会館

変わるインド・変わらぬインド

福味 敦

政治経済学部経済学科 准教授

インドの衝撃

かつて日本人にとってのインドの一般的なイメージといえば、カレー、ターバン、ヨガ、宝石、カースト、物乞い、カオス、貧困などをキーワードとするものが大半であったであろう。しかしながら2003年以降、インド経済がかつてないペースで成長を続けたことで、今後の発展が期待される数少ない巨大市場として世界の注目を集め、その存在感をこれまでに高く高めている。我が国においても、数年前までは目にすることが少なかったインドの経済やビジネスに関する記事を新聞紙上に見ない日はほぼ無く、書店ではインドに関する書籍を数多く手にすることができる。とくにNHKスペシャル「インドの衝撃」シリーズの影響力は大きく、インドと言えば、同番組で取り上げられた二桁の九九を習得する子供たち



ショッピングモール内部(デリー)

のエピソードに代表される優秀な人材と、彼らに支えられたIT産業、拡大する中間層とその消費など、近年の急成長にまつわることがらを連想する人が急激に増えた。

実際のところインドの変貌は、目をみはる勢いだ。筆者は年に二・三回のペースでインドを訪問しているが、ここ三年ほどの間にまず目につくのは、様々な意匠が凝らされた贅沢な空間に、有名ブランドショップが建ち並ぶ大型ショッピングモールが次々と営業を開始していることである。なかには高級ホテルと見まがう内装を誇るモールもあり、未だに小汚い格好でうろつく筆者など、冷やかに行くにも気後れする。同様に、マイカーや携帯電話をはじめとした耐久消費財の急速な普及にも、目を見張るものがある。インドの自動車生産台数は過去10年で5倍までに急増しているし、2005年に5000万件であった携帯電話加入件数は、2011年には中国に続く世界第二位、8億5千万件を超えたとされる。真偽はともかく、物乞いたちが携帯電話で連絡を取り合い、最も売り上げが大きい場所の情報を得ているという噂が囁かれるほどである。

活躍するデリー地下鉄

こうした様々な変化の中でも、筆者にとってインドの勢いを最も象徴すると思えるのは、やはりデリー地下鉄の開通だ。2002年12月にデリーの東西を結ぶ「レッドライン」の一部が開通して以来、着実にネットワークは拡張され、昨年8月には東京メトロに匹敵する総延長距離190キロの全線がついに完成した。ほんの数年前までは、灼熱の太陽の下、窓から吹き込む熱風と砂塵に容赦なく晒されるローカルバスか、厳しい値段交渉を必要とするオートリクシャーに乗るほかなく、移動のみで疲労困憊していた区間を、いまではエアコンの効いた地下鉄に乗って快適に移動することができる。2010年よりエアポート・リンクによって国際空港と市中心部が結ばれたため、初めてインドを訪れる旅人達も、いまでは空港に待ち受ける悪質なタクシードライバーに悩まされることなく、旅をはじめることができる。まさに革命的な変化だ。



デリー地下鉄

日本ではあまり知られていないことだが、このデリー地下鉄の建設費の5割強は日本の円借款によって賄われている。建設には日本側からは清水建設や熊谷組などがインド、韓国、ドイツ企業で構成する共同事業体に参加しているほか、三菱電機や神戸大学の技術が車両や工事現場の安全対策にそれぞれ利用されている。2005年に当時の小泉首相がインドを訪問した際、デリー地下鉄に乗り報道陣に笑顔を振りまいたが、その姿をニュース映像で目にした記憶がある人もいるかもしれない。ハコモノ偏重、現地ニーズ軽視など、ときに厳しい批判を浴びてきた日本の開発援助ではあるが、少なくともデリー地下鉄については、安価かつ安定した市民の足として十二分に機能しており（ゆえに慢性的に混雑しているのではあるが）、目に見える形で有効に使われた例といえるのではないだろうか。プラットフォームには多くの駅員が配置され、乗客の整理を行っているため、基本的に乗降はスムーズだ。駅構内には乗車に際する注意書きがあり、「屋根に“乗車”した場合には50ルピー（約100円）の罰金」など、インドならではのルールもあってたいへん面白い。地上を走るローカルな列車では今なお屋根への乗車も珍しいものではなく、また車内では物乞いや、ヒジュラと呼ばれる女装をした男性、様々な物売り、パフォーマーを目にすることができる。しかしながら、これら地上とは明らかに異質な文化が、デリーの地下で確実に育ちつつあるといえるだろう。

Dual World

開発経済学の古典的な理論において経済発展は、さながら大海に浮かぶ孤島のように近代部門が伝統的社会の中に登場し、次第にそのウェイトを拡大させていくプロセスとして描写されている。1990年代後半までは、インド的なカオスに疲れ果てた際にリラックスすることが可能な安全地帯が、大都市においても多くは無かった。慣れ親しんだルールが通じるマクドナルドやケンタッキーが、さながら砂漠のオアシスのように思われた記憶がある。そうした整然とした空間は、かつて小さな「点」に過ぎなかったが、いまや「線」そして「面」へと拡大し続けている。インド最貧州のひとつビハールの農村を昨年約10年ぶりに訪れたが、役牛がノロノロと水田を耕す伝統的な光景が観られる一方で、道路の舗装が進み、携帯電話やインターネットも問題なく利用できることに驚かされた。未だに残る中世さながらの景色と最新のテクノロジーが共存する状況に、何とも不思議な気分になる。



屋根に「乗車」する人々(ビハール)

デリー地下鉄に代表される「新しいインド」への変貌は、おそらく全国で進んでいるし、今後も続くだろう。ただしその一方で、深刻な問題も多く残されている。海外出張でデリーやムンバイを初めて訪れる日本人ビジネスマンのなかには、メディアによって流布されたイメージとは異なる、予想以上に厳しい状況に驚かされる人も多い。街中に散乱するゴミや排泄物、鼻腔を黒く染める大気の汚れなどから衛生・環境面での問題を、頻発する停電や渋滞からインフラ不足の深刻さを、それぞれ垣間見ることになる。そして何よりインドは、いまなお農村を中心に3億人とも推計される世界最大の貧困人口を抱



川沿いのスラム(ムンバイ)

える発展途上国である。大都市にはスラムが散在し、交差点には物乞いの子供たちが多くたむろしている。信号待ちのさなか、ドアガラスをコツコツと叩き小銭をせがむ少女を拒絶し、車内に微妙な空気が漂うことしばしばである。また、カーストに起因する諸問題についても、根深いものがある。そもそもカースト制度はヒンドウ教の教えと密接に結びついた、インド人の意識や習慣と決して切り離すことのできない存在である。就業や賃金水準の面での差別は緩和されつつあるが、被差別カーストの貧困率は高く、教育や所得水準は低い。

むろんこうした問題に対し、これまで何ら対策が講じられてこなかったわけではない。たとえば貧困問題については、貧困層に対する生活必需品の配給、雇用の提供、マイクロファイナンスによる資金供給など、様々なスキームが用意されているし、カースト差別についても、被差別カーストに対し教育や雇用、選挙における留保枠を設けている。遅々とした歩みではあるものの、貧困率は低下傾向にあり、被差別カーストの人々の生活環境も改善されつつある。

「聖なる牛」は何処に

牛は神様の乗り物であるため、ヒンドウ教徒にとっては信仰の対象である。街中を自由に徘徊する彼らの御姿は、慣れてしまえば何も感じなくなるが、初めて目の当たりにしたときには、やはり度肝を抜かれた。ゴミ捨て場では必ずといって良いほど、食事を探す痩せこけた御姿があった。ときには幹線道路

のど真ん中に鎮座され、大渋滞を引き起こしても全くもって我関せずの様子であった。彼らの悟りきった存在は、最悪の場合には交通事故の原因ともなる。マイカーの普及とともにその弊害がクローズアップされ、デリー市内では2003年頃より、4万頭を超える彼らをなんとかトラックに収容し郊外へ移動していただく作戦が本格的に展開されるようになった。牛たちが郊外から市内へ自ら帰還されてしまうためか、はたまたやっかいな役目を負わされた役人たちのヒンドウ教徒としての躊躇のためか、開始当初はなかなか効果があがらなかったが、ここ二・三年の間で、その御姿を見つけることが難しくなってきた。

「聖なる牛」たちの退場もまた、新しいインドの始まりを象徴している。訪問のたびに街は変貌しており、その便利さをつくづく嘔みしめている。しかしながらその一方で、捕獲を免れた牛たちを路上で見かけたり、オープンしたばかりの国際空港ターミナルを疾走するネズミたちにでくわしたりすると、なんとも懐かしく、楽しい気分になってしまう。このことをインド人の友人に伝えたところ、「もう路上に牛は要らない！」と一笑に付された。外国人ゆえのお気楽な感傷にすぎないことは間違いない。ただ、インドのカオスに心惹かれる方々には、一刻も早い訪問を心からお勧めして、筆を擱くことにしたい。



姿を消しつつある路上の牛(デリー)

所員の活動

浅野清彦

観光学部観光学科 副主任教授

【執筆・翻訳】

- 「ポストフクシマとリスク社会論」 東海大学文明研究所『文明』16号巻頭言 2012年3月
- 「『文化産業概念』における観光の位相」 『東海大学紀要観光学部』第2号 2012年3月



荒木圭子

教養学部国際学科 准教授

【執筆・翻訳】

- 『現代国際関係入門』（共著）ミネルヴァ書房 2012年3月

【報告・講演】

- 「南アフリカにおけるアフリカ正教会」 日本アフリカ学会第48回学術大会にて一般発表（弘前大学）2011年5月

【その他の活動】

- ルダシングワ真美氏/ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル氏講演会「義肢製作とルワンダの現状」（東海大学湘南キャンパス）企画・運営 2012年1月



池上佳助

文学部北欧学科 准教授 主任代行

【執筆・翻訳】

- 「ノルウェーの新聞事情」 『日本新聞年鑑2012』
日本新聞協会2011年12月

【報告・講演】

- 「戦争の記憶とナショナル・アイデンティティ」
2011年東海大学研究フォーラムのポスター・セッション（湘南キャンパス・ネクサスホール）2011年12月

【その他の活動】

- ラジオ番組出演「連続テロ事件が発生したノルウェー」
TBSラジオ『ニュース探求ラジオDIG』2011年7月



磯部二郎

教養学部芸術学科音楽学課程 副主任教授



【執筆・翻訳】

- 「呼吸法から見た初心者と経験者の違い―‘ブレスベルト’のデータに基づく定量的研究」 『日本声楽発声学会』 2012年3月

【報告・講演】

- 「呼吸法から見た初心者と熟達者の違い―‘ブレスベルト’のデータに基づく定量的研究」 日本声楽発声学会第47回総会にて一般発表（東京藝術大学）2011年5月

【その他の活動】

- 現地調査「沖縄の儀礼と音楽」（沖縄本島、石垣島、西表島の歴史史料、芸能、遺物、聖所等の調査）2011年9月
- 平成23年度全日本音楽教育研究会全国大会札幌大会（総合大会） 大学部会の運営（札幌市教育文化会館、札幌コンサートホールKitara）2011年11月

大江一平

総合教育センター 准教授



【執筆・翻訳】

- 「スティーブン・グリフィン教授の発展的憲法理論とその意義―アメリカ合衆国における生ける憲法をめぐる議論との関連で―」 東海大学文明研究所 『文明』16号 2012年3月
- 書評 「アメリカにおけるコモン・ロー的な生ける憲法の進化： David Strauss, *The Living Constitution*, Oxford UP, 2010」 『アメリカ法』 2011年2号

小貫大輔

教養学部国際学科 准教授



【執筆・翻訳】

- 「ハワイ州のチャータースクール見学からえた考察～日本のブラジル学校の未来のために～」 『東海大学教養学部紀要』第42巻 2012年3月
- 「『すべての子供』に教育への権利保障を」 『あなたの隣の外国人～虹はかかるか』 時事通信社 2011年5月

【報告・講演】

- 「滞日外国人の方々に対する保健・医療・福祉」 滞日外国人医療ソーシャルワークセミナーにて招待講演（日本女子大学）2011年10月

【その他の活動】

- 「在日ブラジル人教育者向けオンライン教員養成講座」 日本学スクーリング授業の授業案・教材の作成および講義（場所：群馬、長野、静岡、愛知、岐阜、滋賀）2011年5月、9月、11月、2012年3月

加藤 泰

総合教育センター 教授



川崎亜紀子

文学部歴史学科西洋史専攻 准教授

【執筆・翻訳】

- 「『フランス・ジュダイズム』の再検討—近代フランス・ユダヤ史をめぐる一考察」 『歴史と地理』649号 2011年11月

【その他の活動】

- 「第239回東海大学文学部知のコスモス・展示会 ヨーロッパ統合を考える」 (東海大学湘南キャンパス) 企画・運営 2011年11月



川野辺裕幸

文明研究所所長 政治経済学部経済学科教授

【執筆・翻訳】

- 「復興は地方分権の試金石：震災を逆手に取って課題解決の好機に」 『改革者』第611号 2011年6月
- 「復興財源 国民に広く費用負担を求めよ：社会保障制度改革は『選択と集中で』」 『週刊 世界と日本』第1926号 2011年6月
- 『プレステップ基礎ゼミ』（共編著）弘文堂 2011年7月
- 「制度改革課題と両立する復興政策を実施せよ」 『計画行政』第34巻第3号 2011年8月
- 「競争による新たな質の発見を：ユニバーサル化時代の大学教育改革」 『改革者』第615号 2011年10月
- 「TPPを突破口に閉塞状況を打ち破れ」 『週刊 世界と日本』第1943号 2011年11月
- 「東日本大震災と復興政策」 東海大学文明研究所 『文明』16号 2012年3月

【報告・講演】

- 「東日本大震災と復興経済政策」 第2回文明研究所研究会 2011年6月
- 「A Polar Case」 公共選択学会第15回全国大会にて招待講演（嘉悦大学）2011年7月
- 「わが国経済の現状と見通し」 政策研究フォーラム栃木県連絡会研修会（宇都宮市イタヤ・ホテル）2011年12月
- 「震災復興と経済政策課題」 第5回文明研究所研究会 シンポジウム「震災復興とエネルギー対策」 2011年12月



小林 隆

政治経済学部政治学科 准教授

【執筆・翻訳】

- 『情報社会と議会改革—ソーシャルネットが創る自治』 イマジン出版 2011年7月
- 「英国の小さなプロサッカークラブが生き続ける理由」 『デジタルでアナログな共同体』 Nikkei PC Online 2011年8月
- 「変わる住民の行動とつながり、変わらない議会と行政—情報社会における地域課題の解決のために—」 『住民行政の窓』No.372 2012年2月

【報告・講演】

- Hidekazu Tsuji, Yuta Matsuura, Takashi Kobayashi "Proposal of a Support System for Activating Communities Using Point" The 4th Regional Conference on Information and Communication Technology 2011年10月



中川久嗣

文学部ヨーロッパ文学学科 主任教授



福味敦

政治経済学部経済学科 准教授

【執筆・翻訳】

- 「インドにおける景気変動と財政運営-構造的財政収支の推計と分析-」 『南アジア研究』 第22号 2011年4月
- 随想「インドの経済発展に想う」 『凌霜』 第389号 2011年4月
- 「財政政策と財政制度」 石上悦朗・佐藤隆広編 『現代インド・南アジア経済論』（第2章執筆） ミネルヴァ書房 2011年7月

【報告・講演】

- “Political Economy of Government Expenditure: A Case of Power Subsidy in India” The 5th Indo-Japanese Dialogue on The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy (デリー／インド) 2011年12月
- “Election and cyclical behavior of expenditure policy: An analysis of Indian states” 現代インド地域研究東京大学 拠点第4回研究会 2012年1月



堀真奈美

教養学部人間環境学科社会環境課程 准教授

【執筆・翻訳】

- 「社会保障・税一体改革の動向—医療制度改革に焦点を当て」 『生活福祉研究』 78号 2012年2月
- 『生命と自由を守る医療政策』（共著） 東洋経済新報社 2011年7月
- 『NHS改革に対する評価と日本への示唆』 健康保険組合連合会 2012年2月

【報告・講演】

- 「医療政策のVFM 評価のあり方」 公共政策学会大会 2011年6月
- 「イギリスにおける医療マネジメントのイノベーション」 日本ベンチャー学会医療イノベーション研究部会 2011年9月
- 「イギリス医療制度改革とアカウンタビリティ」 国立人口問題・社会保障研究所 2011年12月
- 「少子化対策について」 小金井市市民講座 2012年2月

【その他の活動】

- 人事院第12回行政研修「少子高齢社会における社会保障の在り方」 研修講師 2012年2月



松本俊吉

総合教育センター教授 現代文明論主任

【報告・講演】

- 「原発論争再考」第1回文明研究所研究会 2011年5月
- 科学基礎論学会総会 シンポジウム「情報の科学としての生物学」にてコメンテーター（愛媛大学）2011年6月
- “The Structure of Adaptationist Reasoning” East Asian Philosophy of Science Workshopにて招待講演（漢陽大学／ソウル） 2011年7月
- 「進化心理学とモジュール集合体仮説」くに荘コロキウム（龍谷大学セミナーハウス）2011年11月



松本亮三

観光学部観光学科 学部長 教授

【執筆・翻訳】

- 横山玲子、松本亮三、吉田晃章「カンパチエ州南部地域における遺跡踏査概報（2010年度）」『古代アメリカ』14号 2011年12月
- 「『総合知』としての比較文明学の構築 ―会長就任挨拶にかえて―」比較文明学会『会報』56号、2012年1月

【報告・講演】

- 「中米マヤの死生観」日本旅行作家協会主催「日没への思慕 世界遺産への夕べ」にて講演（平等院／京都）2011年4月
- 「導入教育の諸形態とその特質」文部科学省主催全国大学入学者選抜研究連絡協議会（大学入試センター）2011年5月
- 「FDの新局面―大学の情報公表義務化と三つの方針を軸として」亜細亜大学FD研修会 2011年6月
- 「巡礼と観光―大山講を中心として―」伊勢原市立図書館講演 2011年11月
- 「学士課程教育とFD―組織的教育の確立に向けて―」中京大学FD講演会 2011年11月
- 「学士課程教育とFD―組織的教育の確立に向けて―」大妻女子大学ファカルティ・デベロップメント講演会 2011年12月
- 横山玲子、松本亮三「マヤの世界遺産、ティカルとカラクムル ～保全と観光を巡って～」平成23年度東海大学代々木公開講座「世界遺産～観光への活用と保存・修復～」のシンポジウム（於東海大学代々木キャンパス）2012年1月

【その他の活動】

- 東海大学ラテンアメリカ・プロジェクト「生命と自然」展の監修 2011年9～10月



横山玲子

文学部アメリカ文学学科 主任教授

【執筆・翻訳】

- 横山玲子、松本亮三、吉田晃章「カンパチエ州南部地域における遺跡踏査概報（2010年度）」『古代アメリカ』14号 2011年12月
- 翻訳 クララ・ベサニーリヤ著『大英博物館双書IV 古代の神と王の小事典3 アステカ・マヤの神々』学藝書林 2011年12月

【報告・講演】

- 「メキシコ・カンパチエ州南部地域における古典期マヤの建築様式の変遷」第6回文明研究所研究会 2012年1月19日 横山玲子、松本亮三（共同研究）
- 横山玲子、松本亮三「マヤの世界遺産、ティカルとカラクムル ～保全と観光を巡って～」平成23年度東海大学代々木公開講座「世界遺産～観光への活用と保存・修復～」のシンポジウム（於東海大学代々木キャンパス）2012年1月

【その他の活動】

- 東海大学ラテンアメリカ・プロジェクト「生命と自然」展の監修 2011年9～10月
- 東海大学文学部 知のコスモス「マヤ文明への誘い―世界遺産パレンケ」の監修 2012年2月





東海大学文明研究所所報 2011

発行人 川野辺裕幸

発行日 2012年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel:0463-58-1211 ext.4900~4902 fax:0463-50-2050